兵士の掟

由良川成美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
兵士の掟

【Ｎコード】
Ｎ８１５６Ｙ

【作者名】
由良川成美

【あらすじ】
これはとある世界の兵士の物語。※旧作『防人の唄』ではご迷惑をお掛けしました。

プロローグ

国内外政策に行き詰った北朝鮮が、韓国に対し軍事進攻を開始し勃発した第二次朝鮮戦争は米韓連合軍の勝利に終わり、十数年の時が流れた。北朝鮮の元指導者は殺害され、朝鮮半島に統一国家の樹立したことで『悪の枢軸』は潰えたかに見えた。

しかし戦後に際する経済崩壊、治安悪化が数十万人の難民を生み出す結果となり、アジアに暗い影を落とすことになる。難民の多くは旧朝鮮人民軍から流出した武器で武装し、避難先の国々で窃盗、殺人、強姦などの凶悪犯罪を繰り返し、現在に至るまで深刻な社会問題を引き起こした。中でも一八万人前後の難民が雪崩れこんだ日本では事情はさらに深刻だった。

日本国内での凶悪犯罪の激増は治安当局の想定の範疇だったが、難民と国内の赤軍が結託するのは予想外だった。ソビエトの崩壊後の時代の波の中で、構成員の激減により弱体化していた赤軍だったが、難民との結託したことにより、それらの諸問題が解消されていった。言語による意思疎通が出来ないことがネックだったが、それも赤軍側がしっかりと教育を施せばいいだけだった。

こうして一つの組織が生まれた。『東亜赤軍』である。

『東亜赤軍』は政府要人の拉致、監禁、殺人を始め、一般人を巻き込んだテロ攻撃などの凶悪犯罪を引き起こした。

治安当局はこれに対処するために右往左往したが、『東亜赤軍』は最早、警察程度ではどうこうできる相手ではなかった。

政府は苦渋の決断を行う。防衛庁を防衛省に昇格し、さらに自衛隊に強力な治安権限を付与したのだ。これを受け、当時の野党だった社会主義党は猛反発。国会は総荒れとなった。

そんな中、政府はもう一つの決断をする。国内の治安維持に特化した『第四の自衛隊』。公安自衛隊、通称、公自の発足である。

世論は、発足当時からテロ組織に対する討伐作戦での無慈悲な性

格から、彼らを『イザナミの軍隊』と叩き続けた。
『イザナミの軍隊』とは日本神話に登場する黄泉の国の女神『イザナミ』の配下である、一五〇〇の怪物から成る恐怖の軍団のことだ。
不名誉な異名を与えられながらも、強力な治安権限と、ＰＡ（強化鎧）と呼ばれる人型兵器を始めとする強力な兵器で武装し、日本国の治安回復に邁進し血を流す彼らの行く付く先は一体、何処なのだろうか――

第一話

二月三日　日本、東京、新宿区霞岳町

場は殺気立っていた。怒号と罵声の交錯と共に奏でる火炎瓶の狂想曲が、その場にいる者の大脳皮質を犯す。都バスが横転し、乗用車が炎上し、近くの店舗が破壊されていく。労働者解放委員会に所属する労働者によるデモ活動ということだったが、ここまで来るとデモというより、最早、暴動だった。

「こちらは警視庁だ。デモ隊に告ぐ。この場所での集会は許可されていない。早急に解散しなさい。さもなくば実力をもって排除する！」

トヨタ製のランドクルーザーを改良した現場式車両のやぐらの上で、拡声アンプに繋がったラウドスピーカーから、警視庁第二機動隊隊長の宮田正平警視は怒鳴った。しかし宮田の怒声にデモ隊は、火炎瓶と催涙ガスの返事を返した。

「――ッ！　第二、第三中隊は前進！　第五、第六は通りの向こうに配置しデモ隊の後方に！　指示があればすぐに挟み撃ちにしろ！　第一中隊はこの場を保守！」

宮田が指示した瞬間、ポリカーボネート繊維で作られた鉄兜と呼ばれるヘルメットと、紺色の防水難燃加工が施された出動服を着た三〇〇人以上の男たちが一斉に駆け出した。手には豆鉄砲のニューナンブではなく、自衛隊で正式採用されている八九式小銃や、イタリアのフランキ社製、スパス１２が握られている。ただし実弾は装填ではなく、対暴徒用のプラスチック弾が装填されている

「止めておいたほうがいいですね」

その時、宮田の耳のイヤフォンが響いた。若い男の声だった。

「下手な挟撃は同志討ちどころか、敵に自虐的な前進を誘発する恐れがあります。手柄を焦る気持ちは分かりますが、相手がまだどんな手で――」

「公自の若造が出しゃばるな！　すっ込んでろ！」
そう怒鳴ると相手は微かに嘲笑したような気がした。
「分かりました。ではお手並みといきます」
宮田は「ですが手を貸して欲しいのならいつでも言ってください」と声の響くイヤフォンを乱暴に外した。少し耳が痛くなった。
あんな無法者共に好き勝手やらされてたまるか。宮田は目の前の惨状を睨みつけながらそう思った。

騒動の渦中より少し離れた一画で複数人の男たちが集まっていた
「周囲、ＯＫです」
見張り役らしき男が言うと、マンホールの蓋が開けられた。中からこれまた数人の男たちが出てきた。
「状況は」
その中の小太りの男が誰ともなく訊いた。
「二機（第二機動隊）が動きました。部隊の配置から察するに挟撃をするみたいですね」
そう言われるとリーダー格の男は満足げな笑みを浮かべた。が、すぐに顔を引き締めると訊いた。
「『あれ』の準備はどうなっている」
「ただ今、あっちで準備中です」
長髪の男は、右向こうにあるプレハブ小屋を指差した。
小太りの男はその小屋の戸の前まで行くと、事前に打ち合わせた通りのノックをした。しばらくして向こうからも独特なテンポのノックが聞こえてきたので戸を開けた。
中にはこの寒中の中、小学生くらいの少女が全裸でパイプ椅子に座っている。そしてその周りを三人の男が取り囲んでいた。端から見れば確実に警察を呼ばれそうなシチュエーションだった。
「調子はどうだ」
リーダーは訊いた。
「はい、順調です。あとはこいつを着せればＯＫです」

そう言ってひげ面の男が、白い女物のコートを突き出して見せた。黒髪の美しい少女は無表情のまま動こうともしない。
「分かった。それと訊いてると思うが――」
「二機の部隊が分散配置を始めたんでしょ？　さっき知りましたよ」
他の男も引き継いで言った。
「いよいよ、コイツの出番ですね」
足元にある大きな木箱をポンポンと叩きながら男は言った。
「部隊の分散配置……頭を狙うには好都合だな」
小太りの男は残忍な笑みを浮かべた。それから言った。
「準備だ。そいつを開けろ」
大きな木箱を顎でしゃくった。男たちはそれに従って、木箱に打ちつけられた大きな鉄釘をバールで引き抜く。そして蓋を開け放り投げると、箱の中身が晒される。
「すげえ……」
いつの間にか小屋の周りに集まっていた男たちの一人が、息を飲みながら言った。
箱の中に並んでいたのは黒い鉄のパイプだった。パイプの根元の部分は薄汚れた木製のレシーバーに収まっており、先端部分には三角形の突起が見える。そしてその頂点に七、八ミリの小さな穴が開いていた。早い話が、銃身、だった。
ＡＫ４７。通称、カラシニコフ。第二次大戦後の軍用小銃を代表する自動小銃で、旧ソ連のミハイル・カラシニコフ氏によって設計。一九四七年に旧ソ連赤軍に採用された。
シンプルな構造で故障の少ないカラシニコフは、ＡＫＭやＡＫ７４などの派生シリーズを生み、生産総数はオリジナルであるＡＫ４７だけでも一億艇に達するとも言われ、人類史上で最も生産された軍用小銃として名を馳せている。
カラシニコフの銃身の脇には、これまた鉄のパイプと木材で作られた円筒が収まっていた。頂点には四〇ミリ口径の穴がポッカリと開いていた。ＲＰＧ７対戦車ロケット砲。これも旧ソ連で設計され

たものだ。
「『北』の連中からもらったブツとは比べものにならない質ですね」
一人の男がカラシニコフを手に取り、手ごたえを確かめながら言った。
小太りの男がニヤニヤと笑いながら言った。
「当然だろう。……それでは諸君、『仕事』を始めるぞ」
小太りの男の言葉に、男たちは拳を振り上げて応える。
「すべては『日本解放』のために！　すべては『東亜赤軍』の栄光のために！」

事態は決着がつこうとしていた。第二機動隊による挟撃制圧が功を奏し、デモ隊は総崩れになったのだ。しかし宮田の心中は晴れなかった。どうも都合が良すぎる。いつもなら相手から熾烈な抵抗があるというのに、いくらなんでも大人しすぎるではないか？　……一応、応援を呼んでおいた方がいいだろう。
「通信士。後方の第三機動隊本部に連絡。至急、支援を――」
――願う。という言葉を通信士に遮られた。
「上空のムクドリより至急！」
通信士が叫ぶように宮田に言う。
「この通りの脇にあるビルの屋上に不審人物を発見したとのこと！」
慌てて周りのテナント・ビルを見回した。その時、視界の隅で何かが爆ぜたような光が見えた。それが宮田がこの世で見た最後の光景だった。

その爆発音は、機動隊とデモ隊が睨みあう現場から数百メートル離れたここ新宿区中央公園にも響いてきた。爆発音は二回、三回と留まるところを知らない。
「爆発……か」
男は――公安自衛隊東京都特別警務大隊隊長、倉橋正美二等公佐は『シキツウ』と呼ばれる八二式指揮通信車の狭い車内の中で、電

子機器を見やりながら独りごちた。しばらくすると、ダダダッと言う銃声が響き始めた。
「大隊長！」
通信士が怒鳴った。
「警視庁の無線を傍受していたところ、機動隊は敵から携帯ロケット砲と自動小銃の攻撃を受けている模様です！」
「火器の種類は」
倉橋は訊いた。
「無線が混乱していて詳しくは分かりませんが、恐らく……」
「ＡＫとＲＰＧか」
通信士に代わって倉橋は続けた。そして顎に手をやりながら言った。
「普通科中隊とＰＡ中隊共に出撃準備を」
隣にいた副官が、ぎょっとしたような顔をこちらに向けた。
「よろしいのですか？　警察から協力要請は――」
「我々は都知事から『あらゆる実力を用いて事態を鎮圧せよ』という要請を受けて出動した。警察からの要請がなくとも何の問題ないだろう」
「で、ですが――」
「出撃だ」
倉橋は有無を言わさずといった感で言うと、副官は力なく頷いた。

公安自衛隊の編成は公安幕僚監部を筆頭に、全国に八つの公安総局が置かれ、将補が総局長を務める。その下に四六都道府県に公安総監部が設置される。一等公佐が総監を務める。各総監部には二個ずつの警務大隊が駐屯している形だ。
一つ目の警務大隊は都道府県警務大隊と呼ばれ、もう一つは特別警務大隊と呼ばれていて、両方とも二等公佐が指揮を務める。
この二つの警務大隊の違いを簡単に説明すると、都道府県警務大隊は都道府県警察の警察業務を支援を任務とし、都道府県知事の要

請があった際はその都道府県内においてのみ、治安維持の権限が付与される。
　しかし特別警務大隊の場合は、内閣総理大臣、内閣官房長長官、防衛大臣、国家公安委員長、国土交通大臣、法務大臣、各都道府県知事、並びに各市町村自治体の長から要請があれば、その時点で全国規模の治安維持任務に際する『独自』の強力な権限を付与される。
　指揮系統も都道府県警務大隊が公安総監部と都道府県知事の指揮下に置かれる警察式であるのに対し、特別警務隊の場合は、公安自衛隊の中枢である公安幕僚監部に、独自の司令部である特別警務部が置かれている軍隊式を採用していた（幕僚監部はあくまで内閣への軍事的助言機関である）。
　また平時に置いても特務警務大隊にはテロや暴動などの凶悪犯罪を防止すると言う名目で、かなり非合法な諜報活動を行うことが許可されているので、テロリストたちにとって特務警備大隊は、なるほど、その二つ名の通り『イザナミの軍隊』に見えたことだろう。

「大隊長より達する」
　神崎優樹三等公曹のＨＭＤに、作戦指揮官である倉橋の顔が映し出される。
「本日一一〇〇時。労働条件の改善を求めて、明治公園に集合したデモ隊は一一三〇時にデモを開始。一三〇〇時より店舗の破壊等の暴動を展開。警視庁第二、第三機動隊がこれに対処していたが、一七〇〇時頃にデモ隊側から対戦車ロケット砲と自動小銃による攻撃によって、複数台の警察車両が破壊され、機動隊員に二百以上の死傷者を出している。なおデモ隊からの攻撃によって第二機動隊隊長の宮田正平警視は殉職した模様」
　窮屈なコックピットの両脇に備えられたジョイスティックの感圧ボタンを、優樹は手持ちぶたさに軽く握った。
「これよりデモ隊を制圧する。ＰＡ中隊並びに二個普通科中隊前進。航空中隊の支援を受けろ。ＰＡは普通科を、普通科はＰＡを守れ。

いつもの訓練通りで問題はない。なお今作戦では全て実弾を使用する」
人工筋肉並びに各アクチュエーター、ファイアー・コントロール・システム正常稼働。ＡＩによるＳＡ対応動作正常。モニター、センサー、計器類、各種兵装異常なし。
「状況開始」
倉橋の号令と共に優樹はジョイスティックを傾けながらラダーペダルを踏むと、ＡＩは状況に応じて最適な行動をとる。
巨人が駆け出した。
一三式強化鎧。全高四・八メートル。換装重量四トン。全備重量七トン。最高速度は歩行時は毎時八〇キロメートル。ローラーダッシュ（脚部の接地面に備えられた車輪による走行）では、毎時一二〇キロメートルを叩き出す。
武装は三五×二二五ミリ弾を吐き出すアーム・チェーンガンを始め、各種ロケット砲にミサイル等々、強力な火器が用意されている。
そしてＰＡ（自衛隊での正式名称は強化鎧だが、現場での呼び名はＰＡで統一されている）の最大の特徴とも言えるロケット・ウィンチだ。これはロケットの力で、特殊素材で作られたワイヤーが付いたアンカー（錨）を撃ち出すことで三次元的機動を実現する。
それに続くのは一一式防弾服を着込んだ普通科隊員たちだ。一見すると対爆スーツのようにもっさりとした風体だったが、人間工学を結集して作り上げられたそれは、快適な着心地と軽快な運動性を実現していた。
スパイダー・ファイバーと呼ばれる特殊繊維を編み込んだ防弾服は、五・五六ミリや七・六二ミリ程度の銃弾はもちろん、Ｍ７９から発射された四〇ミリ榴弾が直撃してもビクともしない強靭な防御能力を持つ。
またパワー・アシスト・システムも搭載しているので、生身の普通科が扱えないような重火器も携帯、使用が可能だ。
巨大なヘルメットのスクリーン部分には、刻一刻と変わる戦況を

リアルタイムで知ることのできる情報表示システムが内蔵されている。
優樹は一三式の肩部からアンカーをビルの屋上に撃ち出す。隣でも同じように他の一三式がウィンチを撃ち出す。
「上昇」
優樹のその言葉でモーターがワイヤーが巻き始め、あっという間にビルの屋上に辿り着く。
「一三式は高所からデモ隊の戦力を漸減。後に普通科が残存戦力を一掃する」
直属の上官であるＰＡ中隊隊長の大門藤則三等公佐の指示に、優樹は「ファンネル４、了解」とだけ呟き、ビル群の屋上を跳躍しながら目的地に突き進む。
「上空のサーチアイ３より各員に伝達！」
『サーチアイ』のコール・サインを持つ航空中隊のＯＨ１からの無線が飛び込んでくる。
「ＰＡ中隊の前方一時の方向にテロリストを確認！　ＲＰＧとＡＫで武装している模様！」
「サーチ・アイ。こちらファンネル４。敵の正確な位置を送れ」
しばらくするとマップの表示されたディスプレイに敵の位置を示す赤い輝点が現れる。
「こちらファンネル４。自分が一番近い位置にいるようだ。制圧射撃を行う。照準補正を願う」
「こちらサーチアイ。了解」
優樹はアーム・チェーンガン（正式には一〇式強化鎧装備用腕部固定式機関砲）の薬室に三五ミリ砲弾を装填する。
「フルオート（連射モード）」
優樹の言葉に一三式はチェーンガンのセイフティをコッキングする。そしてサーチ・アイとのデータリンクで得た情報を基に照準を合わせる。
「中隊長。命令を」

優樹は後方の指揮車にいる大門に指示を乞うた。
「ファンネル４。発砲を許可する」
優樹はジョイスティックのトリガーボタンに指を掛ける。ようやく優樹たちに気付いたテロリストの一人がＲＰＧの砲門を向ける。
深紅のシャワーが黒の空間を切る。
三五ミリの鉄の雨は、人体を引き裂き、内臓を撒き散らさせるのに十二分すぎる威力を持っていた。コンクリートが爆ぜ、凄まじい砲声が辺りに響く。
ものの数秒でビル群の屋上に人と呼べるような物体は消滅していた。

「公自……特警だ！」
誰かが叫んだ瞬間。デモ隊――最早、暴徒と呼ぶべきか。彼らは恐慌状態に陥った。重火器を携帯した援軍が機動隊を撃退し始めた時は、勝利を確信したが、そんな楽観的な考えを吹き飛ばすのに、特務警務大隊の登場は十分すぎる起爆剤だった。
もみくちゃになりながら、同胞を踏みつけながら、デモ隊は逃げ道を模索する。その時、閃光と音が、彼らの網膜と鼓膜を貫いた。一瞬、視界が白く染まったが、すぐに漆黒に染まり、二度と光が戻ることは無かった。

閃光を背に、『東亜赤軍』のメンバーは、ビルの間の路地を疾走していた。
「クソ！　公自が出てくるなんて情報、無かったぞ！　しかも特警を出すなんてよ！」
「とにかく『三六計逃げるが勝ち』。退却だ。退却！」
しばらく走っていると、いきなり目の前のマンホールが開いた。男たちは慌てて銃を構えたが、すぐに降ろした。マンホールから出てきたのは、白いコートを着た、さっきの長い黒髪の少女だった。
「分かっているな？」

少女は黙って頷いた。

大通りは地獄と化していた。特警が独自に改造を施した個人携帯式一二・七ミリ重機関銃（元々、ジープやハンビーに搭載されるブローニングＭ２重機関銃が原型）を装備した普通科中隊の隊員による掃射が始まったのだ。先刻の一三式の集中砲火ですでに壊滅状態にあったデモ隊は、これで完全に止めを刺された。

命乞いをし投降してくる者にも容赦なく、一二・七×九九ミリ弾を叩き込むその様は、機動隊員すら目を背ける惨状を作り出す。

一通りの掃射を終えると、普通科隊員たちは紫煙がたなびく銃身を降ろす。先ほどの喧騒が嘘のように静けさが包み込む。硝煙と血、肉の焼けるにおいが辺りを覆い尽くす。

「こちら第一普通科中隊。デモ隊を制圧。これより残存勢力の掃討に移る」

大隊本部の設置された指揮車の無線が鳴る。

「こちら大隊本部了解。できるだけＰＡ中隊と行動を共にし、奇襲に注意」

「了解」

そのときテナントビルの屋上から何かが、通りの歩道に降下した。先行していたＰＡ中隊の隷属する四輌の一三式強化鎧だった。

「こちらファンネル１。指揮車へ。ポインターを使用する。情報の処理を急げ」

「了解」

そしてファンネル１の操縦士でＡ小隊隊長、小坂清麿一等公尉は腕部のランチャーから大きめのダーツのようなものを射出し、アスファルトに打ちこんだ。

『ポインター』と呼ばれたそれは、地中の音響を捉え、さらにその情報を分析、処理することによって、それが何の音であるか、何物なのかを識別する装備品だった。

しばらくすると指揮車から情報分析士の相沢太郎三等公尉から連

絡が入る。
「こちら指揮車。テロリストと思しき音源を地下下水道で確認。Ａ１３セクターからＤ４４セクター間の通路を進行」
大門が無線に割り込み、ＰＡ部隊に命令を下す。
「こちら中隊長。Ｄ４４セクターに先回りし敵を奇襲し、これ殲滅せよ」
「ファンネル１、了解」
小坂はそう言って、部下に指示を出す。
「ファンネル２、３は俺と一緒に、Ｈエリアのｂポイントに来い。ちょうどＤ４４の真上だ。工作爆薬で地表を爆破し、突入。敵を殲滅する」
「こちらファンネル２。いいんスか？　一応、公道っすよ？」
ファンネル２――北芝茂久一等公曹は気の抜けたような声で訊いた。
「派手にやれという命令だ。ここで俺たちが大暴れすれば『良からぬこと』を考える連中も思いとどまってくれるというものだ」
「そんなもんスかねえ？」
「そんなもんだ」
するとファンネル３――Ｂ小隊隊長宮川衛貞子二等公尉は訊いた。
「ファンネル４を後方に戻してよろしいでしょうか？」
小坂は優樹の方を見やりながら言った。
「三五ミリや閃光弾はおろか、ロケット弾も全部使っちまったんだろ？　だったら後方に戻って補給を受けて来い」
「了解」
優樹はそう答えると一三式を反転させ、大通りをローラーダッシュで駆け抜けていった。地べたに転がる人としての機能を終えた肉片が砕ける。
踏みつけた機動隊員の死体から飛び散った脳漿が、その大きなヘルメットのスクリーンにぶちまけられた普通科隊員が、優樹の一三式に向かって抗議の拳を挙げた。

そして部隊が新たな針路を進む中、北芝はプライベート通信のスイッチを入れた。
「……相変わらず愛想の悪いガキっスね」
宮川もそれに答える。
「ああ、一体何を考えているのか分からないわね。直属の上司としては頭が痛い所よ」
「この前も……、いや、その」
「何？」
「いやあ、せっかく飲みに誘ったんですけど――」
「風俗？」
「……はい」
「別に良いわよ。男なんだから。むしろそっちの気がないなんて、それこそ気味が悪いわよ」
「そ、そうなんスよ！　折角、誘ってやったのに、アイツ『興味は無い』って言って、どっかに行っちまったんスよ！」
アタフタしながら北芝は言った。
「ホント、隊内どころか総監部の中でもアイツ、実はそっちの気が――」
「無駄話はそこまでだ」
小坂がプライベート通信に割り込んだ。
「一尉！　――聞こえてたんスか？」
「聞こえなくとも何を言ってるのか、大体は分かるさ」
無線越しでも落ち込んでいることが分かる北芝を無視して、小坂は続けた。
「確かに……情緒面で難有りなのは確かなことだがな」
小坂もいささか溜息をついた。
「そう言えば俺、アイツのこと何にも知らねえなあ。小隊長、何かあいつのことで何か知ってまスか？」
北芝が訊いた。
「どんな奴、か……」

小坂は少し考え、そして話し始めた。
「神谷優樹。中学を卒業後、養成師団（公安自衛隊において、とりわけ危険な任務に就く部隊の隊員を養成するために設立された。常在としては公安自衛隊唯一の師団）に志願。射撃、格闘、座学に至るまで、優秀な成績を納めて養成課程を修了。その同年に部隊配属先である長野県総監部のにおいて山岳レンジャー訓練と強化鎧操縦士課程をトップの成績で通過。年齢は成人前だが、その優秀な能力が買われて、東京都公安総監部特別警務大隊強化鎧中隊Ａ小隊のに配属……こんなものか」
「こんなものかって、他には何か知らないんですか。こう、家族とか友人とか」
小坂はまた溜息をついた。
「さあな。公幕（公安幕僚監部）の人事部の友人に訊いたんだが、『家族歴に関しては社会的不穏分子の可能性は限りなく少ない』ってだけで他には何も……」
「ふーん」
まだ納得がいかんと言った感の北芝を小坂は叱咤しながら言った。
「さあ、それよか早く終わらすぞ」
「……了解」
「了解です」
そして三輌の一三式がローラーダッシュで、火炎瓶や軍用火薬の炎がまだちらつく通りを疾走する。
――獲物を、狩るために。

新宿中央公園に戻ると、ＰＡ中隊の本部のある一〇式強化鎧指揮車、通称『プチコマ』の周りには、すでに優樹の一三式を整備しようと兵装整備小隊の面々が集まっていた。
「こちらファンネル４。よろしくお願いします」
すると中年の男がそれに答えるようにスパナを振り上げる。整備小隊長の里中一博公准尉だ。

「おう！　まかしておけ！　すぐに弾薬と補給用の電源、ぶち込んでやるからな」
　するとイヤフォンに大門の声が聞こえてくる。
「その必要はない」
「何故ですか？」
　優樹は聞き返した。
「たった今、ファンネル１、２、３から連絡が入った。地下下水道のＤ４４セクターにおいて、テロリストと思しき武装集団から攻撃を受け、これに反撃。武装集団を殲滅したとのことだ」
　公自の中でも優秀な隊員のみが選抜され配属される東京都特別警務大隊の中でも、現強化鎧中隊は公自発足史上最強のＰＡ部隊との呼び名の誉れが高い。
　そんな彼らにとって、雑多な武器しか持たない、しかも生身のテロリストに遅れを取るはずがなかった。
「相変わらずの手際のよさだな」
　倉橋が無線に割り込んでくる。
「撤退準備を行う。急げ。すぐそこに連中が群がっているぞ」
　心底胸糞の悪いという感情を言葉の節々ににじませながら倉橋は言った。
「連中――例の平和団体ですか」
　大門もうんざりと言った感で倉橋に続く。
「分かったら早くしろ。マスコミも血の匂いを嗅ぎつけてくるぞ」
　その無線が切れる前に優樹は、Ｂ小隊に隷属する特大型運搬車の牽引車の上に乗り、一三式を降着させた。
「ご苦労さん。大活躍だったな」
　運搬車の運転手の労いの言葉に、優樹は「どうも」とだけ言った。そしてコックピットハッチを開放し、七四式特大型トラックがベースとなった牽引車に降り立った。
　しばらく周りを見回した。慌ただしく駆ける人、人、人、人。重武装の普通科隊員。それを運搬するＦＶと呼ばれる八九式装甲戦闘

車。弾薬運搬車。『シキツウ』を出たり入ったりする幹部（自衛隊では将校のことを幹部と呼ぶ）たち。
ふと上を見上げると、こいぬ座のプロキオン、おおいぬ座のシリウス、オリオン座のベテルギウスで出来た、冬の大三角形が夜の闇を照らす。
その時、誰かに呼びかけられた。
「おい」
さきほどの運搬車の運転手だった。いつまでも牽引車の上にいられたら邪魔だと思われたのかと思ったが、そうではないらしい。
運搬車の運転席から身を乗り出している運転手は優樹ではなく、公園の中央辺りを見ていた。
優樹も視線をそちらに向けた。するとそこには真っ白なコートを着た美少女がいた。物騒な兵器が跋扈するその場所にあまりに似つかわしくないその存在に、周りの隊員も呆気にとられている。
少女はキョロキョロと辺りを見回していたが、やがて優樹と目があった。
その少女と優樹はたっぷり一分弱は見つめ合っただろうか。やっとその少女を、公園の敷地内に追い出そうという思考に、辿り着いた自衛官たちが動き出した時、少女は優樹に歩み寄り始めた。
優樹は少女を知っていた。と言うよりは少女の『目』を知っていた。
物を見るような目。人を人として見ていない目。小さな身体を揺さぶってくる目。殴ってくる目。蹴ってくる目。本当はやりたくないという目。何ともおこがましい目。
少女がコートのポケットの中のワイヤーを引き、可塑性の高いセムテックスをペースト状に引き延ばし、その上から数千からの鉄球を敷き詰めたそれに差し込まれた複数の引張力で作動する信管を作動させる前に、優樹は脇のホルスターから拳銃を抜いていた。
Ｍ１９１１コルト・ガバメント半自動拳銃。優樹の愛用する拳銃だ。原型であるＭ１９１１Ａ１のフレームに、スプリングフィール

ド・アーモリー社のスライドを載せ新規のパーツで組み立てた仕様でだった。
優樹はガバメントをすでに撃鉄がコックされ、サム・セイフティがかけられている状態『コック&ロック』を数コンマ以下の時間で解除し、少女に向けて引き金を絞った。
撃鉄が振り下ろされ、撃針が薬室に装填された四五ＡＣＰの尻にある雷管を叩くと、装薬が一気に燃焼しガス圧が発生する。その力によって放たれた銃弾を横目に、スライド部分もガスの力で後退し、役目を終えた薬莢を吐きだす。そして単列弾倉から次弾を薬室に装填しながら元の位置に戻った。
一方の四五口径のホロ―ポイント弾は、少女の額の皮と骨を突き破りながら脳内に突入した。無論、大脳皮質は引き裂かれ、脳幹はグチャグチャに破壊された。
少女は即死した。
地面に仰臥する少女だった『物』を見ながら優樹は言った。

「仕事だ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8156y/

兵士の掟

2011年11月29日02時02分発行